2012
爽秋

KAN 環

千曲川地域の人と文化

NPO法人上田図書館倶楽部　　2012 年 10 月

爽秋

紅葉を楽しむ（上田城址公園）

　上田城址では銀杏、もみじ、桜などの彩りを楽しむ季節です。太い柱の櫓門（やぐらもん）、巨石の石垣頑張って、戦国歴史を語っています。門を潜ると真田氏を祀る神社の鳥居、右に進むと本丸跡がお迎えします。秋の日差しが模（かたど）る葉たち、キラキラまばゆい彩りで、心の疲れを癒してくれた。

　お堀もいつか水鏡、景観楽しい魅力を見せる真田氏一族の居城です。

表紙写真・文　矢幡正夫

contents

4 " 図書館訪問記 "　駒ヶ根市立図書館　…宮下明彦

8 " はつらつシニア "　増田節子さん　…伊藤文子

10　東北の美術館を歩く　… 海野郁

16 " 観点 "「震災から 1 年半」…岡田基幸

18 " 千曲川地域の芸術家を訪ねる "　「琴と紬の工房 結 」
吉澤 武さん / 琴づくり　宗廣佳子さん / 紬織り
…吉池みどり　伊藤文子

23 " 連載 "「ラ・マンチャの白い風」地平線の見える風景 …桜田義文

25 " 連載 "「上田小県地域の歯科医療の源流を辿る 三」…村居正雄

29　あとがき

駒ヶ根市立図書館

指定管理者制度を活かして専門性の高い職員集団をめざす

県下で指定管理者制度を導入している代表的図書館が駒ヶ根市立図書館である。うす曇の9月11日にその駒ヶ根市立図書館に小川清美館長を訪ねた。

昨年、県図書館協会の専門研修を駒ヶ根市立図書館で開催させてもらったが、応対してくれた職員からホスピタリティーと職務に対する高いモチュベーションを感じていた。

専門性の高い職員集団を形成

２００３年の地方自治法（２２４条）の改正により、公の施設を民間事業者を含めた指定管理者に全面的に運営させる指定管理者制度が発足した。指定管理者制度の特徴は、「民間事業者の経営管理の効率性、新規事業開発のノウハ

ウ、専門的人材の確保等を生かしていく可能性がある」と言われている。

現在、県下の一般的な図書館職員体制は行政一般職が館長、係長等を占め事務管理部門を担い、直接サービス、間接サービスに当る司書の大半は嘱託職員、臨時職員で構成されている。専門職員の養成には相当年数の経験を積むことが必要なのだが、行政一般職は人事異動が不可避で2年前後で異動を繰り返すし、臨時職員は身分的に不安定なので、県下の一般的な職員体制は専門的なサービス提供に必要な知識・技術・経験の蓄積が制度的に難しいという大きな問題がある。また、同じ仕事をしながら正規職員と臨時職員では待遇面で極端なアンバランスがある。

駒ヶ根市立図書館は平成14年から駒ヶ根市文化財団に管理委託され、平成18年にそのまま指定管理者制度に移行させた。その際、職員の増員を図るとともに、館長以外は全員司書の専門職制を敷いた。これだけでも他の自治体では真似の出来ないことなのだが、特徴的なことは指定管理者制度を導入して専門的職員集団形成をめざしていることだ。

つまり、財団職員に採用されると10年間は腰を落ち着けて図書館の仕事ができるのだ。多くの行政直営図書館の非常勤職員は3年前後の短期雇用であるのと大きな違いである。市外からも優秀な人材を採用し、育ててまた出身地へ返してやるという配慮もしている。待遇は嘱託職員扱いで、比較的条件の良い塩尻市や長野市と同等らしい。

さらに特筆すべきはその嘱託職員の中から正規職員へ昇格できる道を模索している点だ。平成22年に1人の正規職員が誕生したが今後もその願いを持っているという。専門性の高い職員集団形成こそが図書館サービス向上に直結すると言う小川館長に共感するとともに、文化財団や市理事者の図書館理解の姿勢も感じた。

連携、協力が可能

文化財団は7校ある小中学校図書館司書業務も受託している。従って、司書職員の異動は市立図書館と7学校図書館間で行われ、2ヶ月に一回「司書会」を開催しお互いに連携、切磋琢磨し一人職場の学校図書館を支援している。また、13ある保育園・幼稚園にブックトラック

13台分、1台約50冊を選書して毎月巡回させる読育（よみいく）巡回図書館事業を市立図書館、司書会が中心になって実施しているという。

図書館、学校教育所管課、市長部局と行政直営の場合はとかく縦割り行政の弊害が出て連携が難しいのだが、駒ヶ根市のこの取り組みは指定管理者の長所を生かしたものと言える。

駒ヶ根市立図書館は総合文化センターの一角にあるのだが、他に博物館、文化センター、勤労青年ホーム・女性ふれあい館との複合施設を形成している。これらの5施設全てが駒ヶ根市文化財団の指定管理により運営されており、毎月館長会議を開催し、コラボを組んで事業を行っている。例えば、加島祥造さんの講演会を文化センターで行えば図書館は加島さんの本の展示コーナーを設けるという具合だ。ここにも文化財団が一括受託して連携できる指定管理者制度のよさが伺える。

三兄弟が図書館長

小川館長さんのご兄弟は三人が図書館長をされている珍しい兄弟である。

長兄の小川幹夫さんは教職の後、市立飯山図書館長として活躍された。次兄の小川俊彦さんは市川市立中央図書館を創られた方で、全国各地で図書館の立ち上げや運営に携わり、現在も逗子市立図書館の館長を務める図書館運営のスペシャリストである。県の館長会議の講演会講師を2度お願いしたことがある。

館内を案内してくれる小川館長

駒ヶ根市立図書館長の小川さんは、教職の現役時代から駒ヶ根市の子ども読書活動推進に関わっており、4年前から図書館長に就任されている。

ご兄弟のご両親は教育者であった。特に母堂みさをさんはＰＴＡ母親文庫活動全盛時代の県下のリーダーだった。兄弟はそういう教

育的な家庭環境、本や読書、図書館に親しむ環境の中で成長され今日に繋がっていることは想像に難くない。

今後の課題

帰り際に館内を見学させてもらった。展示コーナーがいくつか設置されており、毎月テーマを替え、時事問題についても積極的に取り上げていると小川館長さんから説明を聞いた。

テーマ展示コーナーが多い

駒ヶ根市立図書館にも課題はあるように感じた。例えば、公益財団法人移行、地域や市民の生活、仕事の課題解決を支援する取組み、インターネット時代への対応や竹村文庫目録のネット提供の取り組み等だ。

これらの取り組みも指定管理者制度を活かして専門性の高い職員集団形成をめざす中で実現されるだろうと思いながら駒ヶ根市立図書館を後にした。

平成24年9月11日訪問

長野県図書館協会　宮下明彦

おもしろWeb

「HOTELLI backpackers」

上田市中央に出来たゲストハウス。白を基調にした内装がおしゃれ、一泊から受け入れ可能な素泊まりの宿です。

女子専用相部屋、個室、シェアキッチンなど。　一階にスタンドバー、ショップがあり、ゲストのラウンジとして、コミュニティーの場となっています。

http://www.facebook.com/pages/HOTELLI-backpackers/263394823673039?sk=info

はつらつシニア

増田節子さん

訪問したのは8月上旬の真夏日。出迎えてくれた増田節子さんは、涼しげなアンサンブルにロングスカート、薄紫色に部分染めしたショートカットヘアがとてもよく似合う。戸外の炎暑をよそに、木陰のような爽やかな雰囲気が漂っていた。

増田さんは昭和元年生まれの今年86歳。とてもそんなお年には見えない。お顔にはハリがあり、姿勢も真っ直ぐ。表情がやわらかくお話もなめらか。羨望を抱きながら、若さの秘密を尋ねた。

子どもの頃、お父さんに「おまえは不美人だなぁ」と、よくからかわれた。お父さんが度々言うものだから悩んだ末、あるとき得心する。「ブスというのはブスッとしているから顔つきが悪くなるのではないだろうか。できるだけ笑顔でいよう、そうすればきっときれいな顔になる」と。以来、「身だしなみを整えていつも笑顔で」「教養を身につけて心穏やかに」を現在も実践している。健康にも気をつけ、毎朝ラジオ体操を欠かさない。なかなかできないことを何十年も積み重ねての現在の増田さん、羨望は尊敬に変わった。

増田さんは上田市松尾町生まれの松尾町育ち。戦争中は高校生だった。つらい体験が多かったと思うが、「豊川の軍需工場で1年半働いたことがある」と語るのみ。

上田に帰ってからは食糧増産のため、林を開墾して野菜を栽培したこともあるそうだ。クワを持って仲間と一緒に立つ当時の写真を懐かしそうに見ながら静かに話す。

終戦後はご両親と一緒に商店を経営、70歳近くまで商人として生きる。商人は客とのコミュニケーションが不可欠で、働きながら相手の欲していることを瞬時に読み取る勘が培われた。家事、育児、経営とハードな毎日だったが、この時期に築いた人脈が今も生きる。

リタイア後はそれまでやりたくてもできなかったことを始める。上田社会教育大学文学科ゼミナールに入学。読書を通して文学に親しみ、文筆を楽しむ。特に室生犀星が好きで、大学発行の記念誌に「抒情詩と『杏っこ』に見る室生犀星」という研究報告を寄せている。また、ご両親を看取り、ご主人を送った体験を「三人との別れ」と題してエッセーにまとめた。今までの人生を振り返るとき読み直すという。ほかに水彩画を描いたり、コーラスグループに参加したこともある。

戦時中、食糧増産のため林を開墾して野菜を栽培。右端が増田さん

これらを通してますます交流を広げる増田さん。話題が豊富で気さくな人柄から若い友人も多い。また、上田駅前の変遷をつぶさに見てきた生き字引のような存在に、訪れる人が絶えない。戦後の町の様子を尋ねられたり、方言についての調査協力を頼まれたり。このように様々な人に会い、人と話す。このあたりに健康と若さの秘訣があると確信した。

平成24年8月1日訪問

伊藤　文子

東北の美術館を歩く

～福島、宮城、岩手、青森の旅～

福島県立美術館
宮城県美術館
宮沢賢治記念館
岩手県立美術館
青森県立美術館

福島県立美術館

6月の台風は8年ぶりという。福島駅で東北新幹線から飯坂線に乗り換えて2駅、「美術館図書館前」で降りるとすでに降り出していた。東日本大震災直後、福島県立美術館のホームページには「当分の間休館します」とのメッセージがあった。10数年ぶりの美術館は往時のまま、懐かしさと緊張感が交錯する。掲示された「放射線量のお知らせ」に、福島の置かれた状況をあらためて認識する。

エントランスでは岩手県在住のアーティスト、片桐宏典とケイト・トムソンによる「被災地応援アート・プロジェクト」が繰り広げられていた。震災の傷を癒すよう、復興の励ましになるようにアート作品を送ってほしいと世界各地の美術家に呼びかけたところ、10ヵ国304人が応じてくれた。版画や油彩、水彩などの作品には手書きのメッセージが添えられている。

どこからともなくコーラスが聞こえてきた。スコットランドの警察隊75名のコーラスグループの歌声だと後から知った。CDがミュージカル・ポストカードとして送られてきたのだ。震災以降世界中から届く祈りや励ましの数々、ここにも届いていた。

地方の美術館の楽しみは、地元

飯坂線の駅

出身の芸術家の貴重な作品に出会えること。福島県立美術館をとっていえば、大正期の画家関根正二の世界に魅かれる。関根は僅か20歳で夭折したが、亡くなるまで

被災地支援アート・プロジェクト

福島県立美術館

ひたむきに描き続けた。わが上田市の信濃デッサン館ゆかりの画家でもある。常設展示室で彼の『自画像』、ヴァーミリオン（朱色）が印象的な『姉弟』などと再会できた。

同時に開催されていた「ベン・シャーン　クロスメディア・アーティスト」展は、絵画、写真、グラフィック・アートなどで活躍したアメリカの作家の大回顧展である。人間の尊厳さを描き続けたシャーン。アメリカの水爆実験で死の灰をあびた第五福竜丸をテーマにした「ラッキードラゴン・シリーズ」に足が止まった。犠牲になった船長の久保山愛吉さんを描いた『ラッキードラゴン』などが、奇しくも50年後の現代に警鐘を鳴らしている。ところが国内を巡回してきたこの展覧会、信じがたいことにアメリカの美術館7館が福島だけに所蔵品の貸し出しを拒否した。原発事故による放射能への不安などが理由だという。核問題に関心があったシャーンだからこそ福島で見る意義があったと思う。

ミュージアムショップのスタッフに、いく度となく尋ねられただろう震災の話を聞く。玄関のひさしが落ち、美術品も僅かだが被害を受けた。何より広大な敷地内の芝生すべてを剥して張り替えたという事実に言葉を失う。福島市のシンボル、信夫山のふもとに6万平方メートルもの広大な敷地を有し、憩いの場として親しまれているという美術館。試練

は続くだろうが、芸術のちからで訪れる人々に感動と元気を分けてほしい。

宮城県美術館

福島県立美術館から福島駅に戻り、新幹線で仙台へ。雨足は激しさを増していた。西口バスプールの案内所で、宮城県美術館行きのバスを確認する。

宮城県美術館も数カ月にわたり休館を余儀なくされたという。エントランスの修学旅行生のざわめきを横目に、「アンドリュー・ワイエス展　オルソン・ハウスの物語」の会場へ。この展覧会は昨年4月から開催予定だったが震災のため中止になり、今年5月から始まっていた。

ワイエスは１９１７年アメリカ生まれの20世紀の画家で、アメリカの原風景を描き続けた。オルソン家には体が不自由ながら毅然と生きるクリスティーナと、その姉を支える弟アルヴァロがつましく暮らす。ワイエスは30年にわたり親交を深め、クリスティーナとオルソン家の風景を水彩や素描で描いた。オルソン家の終焉を見届けた１２０枚もの物語、その静謐な世界に時間を忘れて見入ってしまった。

宮城県美術館のコレクション室、ことに洲之内コレクションは見事で、近現代の日本人画家の名画が惜しげもなく並ぶ。昨年朝日新聞に長谷川潾二郎の『猫』が紹介されたが、ひと目で魅了された知人がこの絵を見るためだけにここを訪れている。

私が楽しみにしていたのは併設された佐藤忠良記念館である。10数年前ここで彼の彫刻に出会った。作品はもちろん、エッセイなどでその人柄にも魅了された。美術館前庭では佐藤忠良作『若い女』と『カンカン帽』が出迎えてくれる。宮城県生まれの佐藤は昨年３月30日、老衰のため98歳で亡くなった。長女で

『カンカン帽』

『若い女』

宮城県美術館所蔵作品

女優のオリエさんなど、周囲は震災のニュースを見せないよう気遣ったという。

美術館前でバスを待っていると、観光スポットを回るレトロな「るーぷる仙台」が停まった。有名な飲み屋街脇では、「全国から集まった建設関係の業者などで毎夜にぎわっています」とアナウンス。そういえば、復興バブルなどと耳を疑う言葉を聞いたことがあった。

ホテルのテレビでは台風が列島を縦断すると報じている。明日は計画通りに歩けるだろうか。

宮沢賢治記念館

翌朝、恐る恐るカーテンを開けると雨は止んでいた。台風は進路を変更、東北直撃は避けられたようだ。仙台駅は通勤時間帯と重なり、改札口から次々と人があふれ出てくる。新幹線で新花巻駅へ移動、宮沢賢治記念館に向かう。花巻は賢治の故郷、ゆかりの場所は多いが今回は記念館のみとした。愛用のチェロ、最愛の妹トシのバイオリン、ベートーベンの『田園』のレコードなどが多才な賢治の一面を偲ばせる。

宮沢賢治記念館

数日後、「賢治のチェロの音　よみがえる」とした記事が朝日新聞に掲載された。使わないといたんでしまうため、記念館では定期演奏することに決めたという。「楽器として長生きさせ、チェロの音をよみがえらせることで被災地の方々も勇気づけたい」とのこと。

岩手県立美術館

新花巻から新幹線で一駅、盛岡では岩手県立美術館を訪れる。まずはレストラン「パティオ」でランチ。いつだったか雑誌「サライ」で美術館のレストランを特集し、ここも紹介されていた。企画展にちなんだスペシャルメニューをいただく。岩手県産の食材をふんだんに使い、リーズナブルな価格と期待を裏切らない美味しさ。おススメである。

開館11年目の美術館、入口を入ると壮大なグランド・ギャラリーの

空間が広がる。岩手出身の作家たちに光を当てた2階の常設展示室を巡る。花巻出身の画家「萬鐵五郎（よろずてつごろう）展示室」では『赤い目の自画像』『女の顔（ボアの女）』など萬ワールドが広がる。前衛絵画のパイオニアとされる萬の作品は、強烈な個性で見るものを惹きつける。

隣接する「松本竣介・舟越保武展示室」では、残念ながら松本の作品を見ることは叶わなかった。4月から開催されていた「生誕１００年松本竣介展」は神奈川県立近代美術館・葉山館へと移動していた。岩手出身の舟越保武は佐藤忠良と東京美術学校の同級で、共に戦後を代表する彫刻家となる。互いに研鑽し、励まし合った友情は終生続いた。『長崎26殉教者記念像』『ダミアン神父』、大理石の美しい女性像など、舟越の真摯さが胸に迫る。近現代の郷土作家の常設展示室には、舟越の次男・舟越桂の作品も展示されていた。

グランド・ギャラリー

岩手県立美術館

〈アートのチカラ、いわてのタカラ〉は、震災後岩手県立美術館が掲げたテーマである。昨年度の企画はすべて中止になったが、美術館活動を続けることが復興に役立つとしてさまざまなイベントが開催されている。

青森県立美術館

３日目、新青森駅からのシャトルバス「ねぶたん号」で同乗した男性が、「青森県立美術館は冬がいいですよ」という。そういえばＮＨＫの「日曜美術館」では雪景色の美術館が紹介されていた。シャガールのバレエ「アレコ」の舞台背景画と奈良美智（よしとも）の『あおもり犬』が印象深く、いつか行きたいと思った。

夢が叶って受付から屋外連絡通路を通り『あおもり犬』に会いに行く。高さ8・5メートル、足元に立

ちその大きさを実感、穏やかな表情が見下ろす。ただこうして触れられるのは4月から初雪が降る頃まで。冬期は室内からガラス越しの対面となるが、雪帽子を被った『あおもり犬』を見ることができるという。弘前出身の奈良の作品、他には誰でも一度は目にしているはずの女の子たち。その不思議な表情に惑わされる。三方にシャガールの舞台背景画が掛かる部屋には沢山の椅子が並ぶ。ゆったりと腰を掛け見上げていると、幻想的な世界に吸い込まれそうな気がしてくる。

『あおもり犬』

常設展と合わせて特別展示されていたのは「超群島―ライト・オブ・サイレンス」。原発問題や近代社会のひずみなど、震災以降の日本列島のありように美術家や建築家が大々的に取り組んだ。最後の部屋に置かれた「菜の花ヒール」は、歩くとヒールの先端から菜の花のタネが地中に植えられ、あとから花が咲いていくというもの。福島の再生を願って作られた鮮やかなオレンジ色のヒールが、重いテーマが続く中、ひとすじの光となっていた。

この美術館のスモック風ワンピースのユニフォームは実にいい。裾付近にパッチワーク模様が入ったユニフォームのスタッフもいて、「素敵ですね～」と思わず声を掛ける。「6年目になり、擦り切れた部分を青森のこぎん刺しの精神に倣い直しました」。

次は雪の中を訪れてみよう！

とにかく東北に行こうと思い、巡ったのはたまたま公共の美術館。それぞれに独自色あふれる外観と内容を兼ね備えている。自治体が文化面にも力を入れていることが分かる。

震災以降、美術館は試行錯誤しながらもアートのちからを信じ前向きに取り組んでいる。そう感じられた旅であった。実際絵画や音楽は人を日常から感性の世界へと誘い、

心を満たしてくれる。
旅の最後に乗ったタクシー、年配の運転手の津軽訛りが心地よく耳に残った。

海野　郁

青森県立美術館

観点

震災から１年半

岡田基幸

財団法人上田繊維科学振興会　理事
信州大学繊維学部　特任教授
内閣官房　地域活性化統合事務局　地域活性化伝道師

先日、10数年振りに杜の都「仙台」を訪問した。東北地域に行くことは度々あっても、仙台に降り立つことは実に久しぶりである。夏休み明けの９月上旬の木曜日、ＪＲでいえばいわゆる閑散期である。仙台ほどの大都市であれば、ホテルもたくさんあり、繁忙期の当日でもなんら困らない。そのはずであったが、訪問数日前に宿泊ホテルの目星をつけようとインターネットで検索をしてみると、どのホテルも満室、満室・・・である。いわゆる三大ビジネスホテル以外の、いわゆる地元資本のホテルもそうである。仙台の七夕祭りは確

か 8 月だったはずだが、念のため仙台市のホームページの「祭り」を検索して確かめたほどである。満室理由もわからないまま、なんとかカプセルホテルの残り 3 室の一つを予約することができ、インターネットカフェやマクドナルドで一夜を過ごすことだけは避けられた。カプセルホテルって予約するものだっけと疑問に思いつつ。

さて、その仙台。駅に降り立つと、平日昼間なのになにやら熱気を感じる。ただし、祭りの熱気ではない。東北新幹線の混みようや街中にいる人々、市バスの中の雰囲気、同じ地域の中核都市の札幌や博多とは明らかに違う熱気である。空きが残り 3 室しかなかったカプセルホテルにチェックインして、その熱気の理由がようやくわかった。宿泊客層は工務員や職人、建設業関連のビジネスマンが目立ち、仙台市を拠点に宮城県沿岸部の震災復興支援に携る方々である。伺ってみると、仙台市内のホテルは既に年間契約されている場合もあり、カプセルホテルにも長期契約の専用ロッカーがあるらしい。

多くの犠牲者を出し、多くのモノや思い出を消え去った震災から早や 1 年半。

仙台空港に津波の押し寄せる衝撃の映像をはっきりと思い出した。早や 1 年半ではなく、まだ 1 年半である。

おもしろWeb

国民生活センター / 相談事例と解決結果

http://www.kokusen.go.jp/jirei/info.html

注文した覚えのない魚介類が代金引換の宅配便で届いた／身に覚えのないカードローン／紹介料を払うと言って友人を紹介させる投資用教材販売業 --- このような相談事例と解決への道筋がぎっしり。問題解決のヒントを見つけることが出来るかもしれません。

琴と紬の工房　結

吉澤 武さん / 琴づくり
宗廣佳子（むねひろ）さん / 紬織り

カッコウの爽やかな声が響く5月下旬、東御市にある「琴と紬の工房 結（ゆい）」を訪ねた。「ピンポーン」すぐに「はーい」と宗廣佳子さんの明るい声。それを聞いて「宗廣さんは、きっと話しやすくて素敵な方」。この直感は当たり、あとから出てこられたご主人の吉澤武さんもにこやかな表情。かしこまっていた当方は、おかげで肩の力が抜け、取材は和やかに進んだ。

ご主人の吉澤さんは琴づくり、奥様の宗廣さんは紬織り。お住まいにそれぞれの工房を持ち、日々伝統の技を紡ぐ。日中は黙々と手仕事に向き合い、夕方合流。きょうの仕事がうまくいったかどうかは、お互いの顔を見ればすぐにわかるという。それぞれ違う分野ながら、ものを創る共通の喜びを持ち、深く理解し合っているおふたりの素顔がお話の随所に表れていた。

紬織り　宗廣佳子（むねひろよしこ）さん

いつも心しているのは、「着る人を引き立てる着物を織りたい」ということ。「仕上がった時の嬉しさと、気に入ってくださる人との出会い、２度の悦びに充実感がわく。だれがいつ購入したかまでほぼ記憶している」とおっしゃる。

住子さんは、１９５０年岐阜県郡上八幡で宗廣力三（むねひろりきぞう）氏の長女として生まれる。力三氏は１９８２年に「紬縞織・絣織」保持者の人間国宝に指定されている。郡上八幡の佳子さんの実家では来客が多く研修生も多数いたので、お母さんはいつも彼らの世話や雑用に追われていた。お母さん自身も織ることが大好きだったのに、なかなかその時間をとれなかった。大学卒業直前にお母さんが亡くなった時「母がやろうと思ったことを私がやらねば」と思い、本気でこの道を歩むことにした。実家はお兄さんが継いだので、佳子さんは、１９７７年小諸市で独立し、１９８０年に東御市に移り、紬織りに専念している。

紬織りは糸を染めることから始まり、反物として仕上がるまで全工程３、４ヶ月かかる。そのうち、はた織り機にかけて１反の反物に仕上がるまで１、２ヶ月かかる。

まず織模様を設計し、どぼんこ染めなどの技法を用いて糸を染める。どぼんこ染めとは、今風にいうならばグラデーション、淡色から濃色までどんな割合で染めるか考える時は緊張するが充実した時間だ。染め始めたら最後まで気が抜けないが、その工程が一番ときめく時間。ほとんどの色を矢車（やしゃ）・胡桃・栃・栗・ヤマモモ・紅木といった植物の実や樹皮で染める。紬は50年先、１００年先の人も「美しい・素敵」と言ってくれる。それがうれしいので、色が堅牢で安定することが大切だと佳子さんは言う。染め上がった時自分のイメージと違う場合もあるが、やり直す場合と横糸と合うかもしれないとそのまま使う場合がある。最初のイメージと違っても思いがけず斬新な物ができる場合があり、学ぶことも多い。自然の力には人間の思

杼（ひ）或いはおさ

いの及ばないすごさがある。

佳子さんのお父さんは家蚕の他に恵利蚕糸(野蚕の一種)を使ったが、現在では入手が難しい。佳子さんは今年初めて東御市の信州大学の農場が育てている天蚕を分けてもらうことが出来、どんな風に使おうか楽しみにしている。

作品は着物と帯が中心だが、タピストリー・バッグ・敷物など小物もある。それらはそれぞれに落ち着きのある風情を見せている。佳子さんは仕上がった和服一枚いちまいに、わが子のように名前を付けている。たとえば、海波・春の海・黎明・信濃暮色・宇宙(こすもす)など。

佳子さんのお父さんは「道ですれ違った時、何となくほのかな爽やかさを残して通り過ぎて行く着物」が作りたいと言っていた。「技を感じさせない高度な技を磨け」というお父さんの思いは、佳子さんの中に生きている。

一時はお父さんに反発もしたと言う佳子さんだが、今ではこの思いをしっかり受け継ぎ、今日も美と向かい合っている。

注　矢車は(やしゃ)と読み、植物染料の一種

平成24年5月25日訪問

吉池　みどり

絶美に仕上がった紬織

琴づくり　吉澤 武さん

「琴線に触れる」という言葉があるように、琴の音色には人の心情を揺さぶるものがある。しっとりとした悠久を感じさせるような調べは、日本人の心のふるさとかもしれない。

奈良時代に中国から伝わってくるはるか昔、弥生時代には日本古来の原型が生み出されたとされる。長い歴史を持つ琴を私たちは「お琴」と呼ぶことが多い。

このような伝統的な琴を吉澤 武さんは50年間作り続けている。機械を一切使わず、すべて手作り。長野県内でただひとりの手作り職人である。

東京生まれの吉澤さんは15歳の

琴の型紙板

とき、工匠のお父さんについて琴づくりを始める。技は見て覚えると言われる世界で10年間修行した後、小諸市の楽器店で琴づくりを教えるため、初めて信州へ。爽やかな気候、雄大な風景が気に入り、東京へ戻らずに東御市にて独立、工房を構える。

吉澤さんは材料選びからこだわる。琴の胴に当たる甲及び裏板には会津産の桐を使う。「寒い地方で長い年月をかけて、少しずつ太くなった木は硬くて木目がきれい」と吉澤さん。30年以上の材を切り出し、おおよそ2mほどに切って2～3年天日や雨にさらす。灰汁(あく)を抜いて乾燥させた後、注文に応じた大きさに切り、制作にとりかかる。何種類ものカンナを使い分けて、甲板にカーブをつける。一応、型はあるが、手の感触、見た目で仕上げていくことが多いと言う。音響に最も影響する工程なので神経を集中させ、厚み2・5センチメートルの箱型を丹念に仕上げる。吉澤さんと道具が一体になり、長年培ってきた技が光る。

甲の裏側にはギザギザ模様の「綾杉」を施す。雑音を消して、音を良くするためだという。裏板を張り合わせたら表面をこてやバーナーで焼き、木目を浮き立たせる。それからインド産の紅木や象牙を使って「竜舌」という飾りをつける。ノミやカンナで削りながらぴたりと納まるまで微調整を繰り返す。最後に弦を取り付けて完成、この間約1ヶ月。「1面仕上げると体力を消耗しきってしまう」と話すが、それぞれの材料を、工程の一つひとつを熱く語る吉澤さんから、琴への思いがほとばしる。

また、昨年1月から20代の青年が「自分も琴職人になりたい」と通ってくるようになり、吉澤さんは暖かいまなざしで指導を続けている。

今までに制作した琴は500面以上、日本

工具の数々

全国で愛用されている。使い込むほどに音の通り道ができて響きが良くなるという。「いい音が出ますね」と客に言われるのが最も嬉しいという。

琴は架空の竜を形にしたもの。大海や地底に棲み、風雨を自在に操る竜の魂が宿る琴。そのパワーはつまびかれる弦から聞く人の心に届く。「自然と関わりのある琴、あわただしい現代だからこそ多くの人に親しんでもらい、次世代に引き継がれることを望んでいます」。吉澤さんにとって制作50年の節目は通過点でしかなく、これからもより良い琴を作り続けたいと考えている。

平成24年5月25日訪問

伊藤文子

秋の象徴　コスモスの花

田園、庭先、道路沿いにピンク、赤、黄色もあって地域の秋を彩っています。コスモスの花言葉は乙女の純潔や真心と言われますが、ピンク色には少女の純潔、赤色には調和と言われ、白いコスモスには美麗という意味があるそうです。塩田平もカラーが多くなり、純粋な白だけのコスモスにはなかなか出会えないこの頃です。

写真・文　矢幡正夫

連載　ラ・マンチャの白い風

桜田義文

地平線の見える風景

ラ・マンチャはスペインの中央に位置し、標高６００メートルから１０００メートルのメセタと呼ばれる高地である。面積はおよそ２００キロ四方というから日本の九州ぐらいの広さがある。ほとんど山がなく地平線まで赤茶けた荒野が続く、マンチャとはアラビア語で乾いた土地を意味し、そのとおり半砂漠のようなやせた大地に小麦、ブドウ、オリーブを植えわずかばかりの収穫を得ている。

しかし、スペインの中心に位置することからローマ人、ゲルマン民族、イスラム教徒、そしてキリスト教徒たちが２０００年以上前からこのラ・マンチャの荒野に足跡を刻み、あるいは市民戦争の戦場に、あるいはドンキホーテの舞台に、あるいはレコンキスタとよばれるキリスト教徒とイスラム教徒の７００年間もつづいた戦場になった。

こうした歴史の血や涙がしみ込んだラ・マンチャに、とりわけ今から75年前におこった「スペイン市民戦争」のロマンに惚れ込んでこれまで10回以上も絵の取材のためにその地を訪れてきた。

ラ・マンチャの中央にコンスエグラという小さな村があってその背後に風車が10基ほどならぶ丘がある、この丘に登ってみるとよい。３６０度、地平線までつづくラ・マンチャが見えるはずだ、冬のラ・マンチャはむき出しの裸の荒野だ。麦の畑がわずかにありそこだけが薄緑で、オリーブ畑は縞模様にブドウ畑は枯れ枝が立ち、そのほかのほとんどの大地は赤茶けた不思議な色模様で、もし幸運に

「ラ・マンチャの白い風　コンスエグラの丘から」
水彩画 10 号　桜田義文

も雲がかかり日影が通り過ぎると紫色の縞がながれる。

私はこの丘から見るラ・マンチャが大好きで、いつも風車の土台に腰掛けて長い時間をすごす。スケッチブックを広げてみるがあまりにも感動が強烈すぎて絵にならない。あふれる涙をじっとこらえるが感動を共有する相手がいないひとりだけの旅はつらいものだ。

どうして砂漠のようなラ・マンチャの地平線をみると背筋がゾーとするような感動におそわれるのか。砂漠のような台地の光と影のむこうに幻想のようにみえるのは60年以上前に満州の荒野でみた地平線ではないのか。

私は昭和18年の1月に旧満州国（現中国東北部）の奉天（現瀋陽）に生まれた、昭和20年8月9日突然のソ連の参戦によって当時住んでいた新京（現長春）にソ連軍がせまる、いったんは現在の北朝鮮に逃げたが。そこで日本の敗戦をむかえる。朝鮮半島を南下することは危険すぎることと母が身重であったこと（10月に弟を出産）から満州にもどった。満州では日本人を守るはずであった関東軍が２００万ともいわれる日本人を置き去りにし、捨てられた日本人は地獄の苦しみの中にいた。敗戦から1年、ようやく引き上げが開始され8月22日に私たちは新京南駅から無蓋貨車にのせられてのろのろとコロ島までゆく。その貨車の中から見た満州の地平線、コーリャン畑が地平線までつづき、いつこのコーリャン畑から匪賊が攻めてくるかわからない不安のまなざしの向こうに真っ赤な太陽が地平線に沈んでゆく。当時３才半の私の脳裏にインプットされそのまま封印された風景が60年のちに、ラ・マンチャの地平線のある風景によって突然よみがえったのだろうか、ラ・マンチャの悲しげな荒野と地平線をまえにただうなだれるばかりだ。

桜田義文略歴

1943年1月14日　旧満州国奉天市に生まれる
1946年9月　日本に引き揚げる
1958年　県立長野高校入学
1966年　中央大学法学部卒業、カナダに渡る
1968年　カナダからヨーロッパ、中近東、アジアを旅行
1969年　フリーのライターとして週刊誌、月刊誌でかせぐ
1975年　青木村に帰る、農協共済連に務める
2006年　定年により退職、青木村郷土美術館長となる
2010年　「私は何をしたか―栗林一石路の真実」を仲間と出版
2006年から2011年にかけて水彩画展を7回開催

れんさい

上田小県地域の歯科医療の源流を辿る　三

日本歯科医学史学会会員
元海野町歯科診療所長
村居　正雄

門石の開業場所は上田町のどこだったのか？

長野県歯科医師会史第５巻は、明治18年から大正15年に至る41年間に長野県内で開業した全ての歯科医師の氏名、生年月日、本籍、開業地、開業年月日、免許番号などが記載されている貴重な史料である。その名簿によると、門石の開業地は上田町４６１番地となっている。

当時の番地は戸番（こばん）といわれるもので、明治40年ごろまで使われ、その後地番（ちばん）となり、昭和40年代に現在の住居表示の番地になった。上田市役所、法務局、博物館、図書館を尋ねまわったが、戸番と地番を照合できる資料が無いとのことであった。つまりロゼッタ・ストーンに当たるものが無いのである。郷土史家の滝沢主税氏に聞いたところ、戸番の１番地は踏入で、北国街道に沿って常田から横町、海野町、原町を経て柳町へと番地がつけられていたという。道路の右に行ったり左に行ったり、また空き地があればそこを飛び越えて番地がつけられたらしい。

たまたま私の母方の先祖小川家（海野町）の戸番が４４８番地であったことが古い戸籍謄本からわかった。また後に触れる入歯師川上喜作（川上糸店のご先祖）の住居が４２８番地だったことが歯科医師会の記録に残っている。そこから門石の最初の開業地は海野町の現在のスクランブル交差点の辺りだったのではないかと推定している。戸番は明治末期に忽然と消えてしまう。もし明治期の旧家で古い戸籍謄本が残っているお宅があったら、是非調べて情報をいただきたいと思っている。

なぜ門石は歯科医師会の設立に奔走したのか？

門石は、明治30年上田町で開業すると直ちに上諏訪の笠原恭三郎に手紙を書き、県下で開業する同業者の会合を提案した。しかし当時は信越線以外に交通機関がない大変不便な時代だったから実現は困難を極めた。明治35年に篠ノ井線の篠ノ井―松本間が開通すると、しばしば松本で会合をもち、技術的な情報交換や長野県の歯科医療の将来を熱く語り合った。

上田町に開業する歯科医師は、明治35年には三瓶茂吉、小林清吾を加えて3人になる。県下全体では、15人になっていた。明治35年12月、日本歯科医会会長高山紀斎から門石に対して、「全国の歯科医師が大同団結して吾人の目的を達成しよう」という檄文が届く。吾人の目的とは、歯科医師法の制定ならびに非歯科医の取り締まり強化を政府に陳情することであった。高山は門石の恩師である。門石は交通不便も顧みず長野県内を奔走して、終に明治36年2月20日松本において、日本歯科医会長野県支部（長野県歯科医師会）が誕生する。門石はその労が認められて、支部長（初代会長）となった。推測ではあるが、そもそも門石が長野県で開業することになったのは、高山らの依頼で県下歯科医師を取りまとめる使命を受けていたのではなかろうか。明治41年9月、長野県での組織化が一段落すると、門石は会長の職を辞して上京し、恩師高山紀斎と血脇守之助の片腕として、歯科医師養成あるいは日本歯科医師会役員として活躍することになるのである。

長野県歯科医師会設立当時の
役員会での記念写真。
中央が門石長秋で役員の中では
最も若かった（26歳）。

血脇守之助と門石長秋そして野口英世

前号で門石と野口英世が同じ1枚の写真に写っているのはなぜだろうと、不思議に思われた方は多いのではなかろうか。二人にとっ

ての師である血脇守之助のことをまず話さなければならない。血脇は明治3年千葉県我孫子に生れる。11歳のとき英語を学ぶ目的で慶応義塾童児寮に入学、その後さらに東京英学校、明治英学校などで英語を研鑽し、最終的に慶応義塾別科を20歳で卒業する。新聞記者や新潟県で英語教師を経験し、一念発起して歯科医師を目指して高山歯科医学院に入学する。24歳であった。その豊富な経験を買われ、学生時代から高山の信頼を得て学院の運営に関わることになる。明治28年医術開業試験に合格し、高山の後継者として学院の充実に力を注いだ。門石が高山歯科医学院で学び始めるのは明治27年で、血脇とは7歳違いであったがよほど馬が合ったのか、その後生涯にわたって強い絆で師弟関係が続くことになる。

明治29年8月、血脇は福島県会津若松のドクトル渡部 鼎の招きで、渡部の向かいの旅館の一室を借りて出張診療をすることになった。当時福島県下には、福島町を除いては資格を有する歯科医師がいなかったため、近郷から患者が殺到した。血脇は渡部の診療所で一人の青年と出会う。渡部の下で書生をしながら医師を目指しているという。分厚い医学原書を前に夢中で独習している若者の姿に感動して血脇は、上京して困ったことがあったらいつでも訪ねて来なさいと名刺を渡して励ました。青年は野口清作、後の野口英世で、10月の医術開業前期試験を目指して猛勉強中であった。

高山紀斎の胸像の前に立つ
血脇守之助と野口英世
（大正4年10月）

11月、高山歯科医学院を1人のみすぼらしい風体の若者が訪ねてくる。どうしても血脇に会いたい、会えるまでは梃でも動かぬという形相であった。招き入れて話を聞くと、10月の前期試験は無事合格できたが蓄えも底をついて、宿賃、食費を支払えぬ状態である。できれば学院の車夫にでも雇ってもらえないかという相談であった。不憫に思った血脇は、学院長に内緒で賄いの老夫婦に頼み込んで、学僕

として寮の空室に野口を住み込ませることにした。

野口は翌30年10月後期試験に合格、晴れて医師となるのであるが、血脇はその間ドイツ語学習の授業料、予備校済生学舎の学費、さらに不自由な左手で打診ができるように東大外科教授に依頼して、再手術を受けさせるなどとことん面倒をみた。また医師合格を機に高山歯科医学院講師に採用し、病理学と薬理学を講義することで収入の道を開いた。昨日までランプのホヤ磨きや始業、終業の鐘を撞いていた学僕が、いきなり講義を始めたので学生達は驚いたに違いない。会津訛りではあったが、英語、ドイツ語などの医学用語も正確で、理路整然とした講義だったので直ぐに学生の信頼を得たと記録に残っている。

門石が学んでいた明治30年9月までは野口も学僕の立場であったので、二人の間にはこれという接触も無かったのではなかろうか。そして前号の写真であるが、脚注に明治29年4月と記載されているが、これは30年4月の誤りであろう。

野口が渡米して成功したのは彼の努力は勿論だが、その陰には小林 栄、渡部 鼎、そして血脇の3人の師がいたことを忘れてはならない。野口の父親は入婿であったが酒に溺れ、博打に手を出し家計は貧乏の極みであった。母シカの献身的な働きがなければ、彼は勉学を続けることはできなかった。彼の家庭環境と身体的なコンプレックスは、金銭への貪欲なこだわり、親切な人にはとことん甘えるルーズな性格、飽くなき名誉欲に繋がった。野口英世の伝記本は枚挙に遑がない。興味のある方は是非読んでほしい。

次回は、当時大きな問題となった入歯師について触れたい。（つづく）

〈参考文献〉

野県歯科医師会史　長野県歯科医師会　昭和11年

血脇守之助伝　松宮誠一編　東京歯科大学　昭和54年

野口英世　井出孫六著　岩波ジュニア新書　平成16年

あとがき

この電子ジャーナル「環」には５本のシリーズを掲載している。それらをスタッフが分担して取材しているが、取材前にはできるだけ情報を集めるようにしている。取材先を紹介してくれた人から話を聞いたり、関連した本を読んだり。特に有効なのがデータベースで、収録された大量のデータから系統的に目的の情報が得られる。幸運にも上田駅前の上田情報ライブラリーには、信濃毎日新聞データベース、ルーラル電子図書館、聞蔵Ⅱビジュアルなど７種類のデータベースが用意されており、誰でも利用することができる。

ここで取材先を検索する。できるだけ多くの情報が入手できるように、検索窓には関連するさまざまな言葉を入れてみる。データベースも２～３種類にアクセスする。このようにしてある程度の情報を得られると、全く会ったことのない取材先に対して親近感を持てるようになる。インタビューの要点もつかむことができ、心構えができる。

私たちにとってなくてはならない存在になっているデータベース、電子ジャーナル「環」の頼りになるパートナーである。（木漏れ日）

訂正

第７号「夏野」の 22 ページ、蓮の写真説明文の上から２行目、「研見川遺跡」は「検見川遺跡」の誤りでした。訂正致します。

電子ジャーナル 環　スタッフ
伊藤文子　海野郁　西入幸代　東方明子
宮下明彦　矢幡正夫　吉池みどり

環（かん）　千曲川地域の人と文化　　第 8 号　　爽秋
2012年 10 月発行
NPO 法人上田図書館倶楽部

表紙及び文中の写真は無断使用を禁じます